保育所における施設児保育についての一考察

日本福祉大学　大森弘子

現在、多くの保育園において施設児と家庭と一しょに保育されている。しかし、実際の保育上には施設児と家庭児との身体的・精神的な差から起こる種々の問題があり、保育をゆがめている。

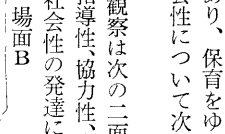
そこで、この研究は幼児の社会性について次の二点を明きらかにすることを目的におこなった。

実験は観察法でおこなったが、観察は次の二面について実施した。

①社会的行動について(攻撃性、指導性、協力性、自己顕示性、依存性)

②遊びの型について(Parten の社会性の発達による遊びの分類)

実験計画



(以上を三日間にわたり二度くり返す)ひとり一分二回観察

対象　施設児一六名、家庭児一六名。

結果

1、施設児と家庭児との差……社会的行動については、場面に関係なく施設児は依存性が高く、家庭児は自己顕示性が高い。遊びの型は、多くの場合に家庭児の方が社会性が高い遊びが多い。

2、後から加わる施設児が最も社会性が低いあそびが多い。

3、施設児は前から遊んでいるグループならば、後から加わるグループが家庭児でも施設児でも、影響はうけない。

4、施設児が後から加わるグループならば、家庭児の中に加わるよりも、施設児の中に加わる方が、社会性の高い遊びが多くなる。

これらの結果に対し、施設児を家庭児と一しょに保育することを前提として考慮し、施設児に出来るだけ抵抗の少ない方法を考え、実際の保育に生かしてゆきたい。

在園時の記録と進学後の傾向

東京・神田寺幼稚園　昼間光威
福永かをり
石村紀子

在園時の評価と進学後の傾向を比較調査し今後の保育の参考とする。主に学業状態を中心としてそれに伴なう学習態度、行動面について検討した。調査にあらわれた傾向としては、在園ＩＱと学業成績にはかなりの相関が見られるが、児童自身の学習態度、それに加えて周囲の条件、環境などによってその学習状態が左右されることが多い。学習状態を(A)学年ごとに成績が上昇しているもの、(B)学年を通して成績に比較的変化のみられないもの、(C)成績の下降しているもの(D)学年により成績の上下の変化が大きいものの四つのグループに分け、そのグループを中心にして学習態度、行動状態などを見た。その結果、学習態度と成績に大きな相互関係が見られた

のは言うまでもなく、また、個々の性格的傾向によってあらわれる日常の行動状態が学習態度にも同様にあらわれ影響を及ぼしている場合の多いことを見た。もちろん、周囲の環境、刺戟による影響の大なることも言うまでもない。学習態度についてみると、Aグループは努力する、まじめ、確実な学習。Bグループは持続性、積極性に欠け意欲に乏しい。Cグループは注意散漫、努力不足、意欲に欠ける。Dグループは落ち着きなし、学習にむらがある、などの点が多く見られる。したがって以上の調査から今後の保育に当ってわれわれが更に心すべき事は、いかにひとりひとりを深く観察し導くかということである。不安定な状態にある幼児の場合、家庭とも密接に連絡して環境を整え情緒的に安定した状態に導くこと、どんな事にも努力する態度、やり通す意志というような生活態度を養うことなどが、ふだんの保育の中で十分考えられなければならないと思う。常に幼児の個人観察を十分にして多少の変化にも考慮を払うことの大切さを痛感する。

幼児のムシ歯が健康に及ぼす為害について（第一報）

日本女子体育短期大学　深田英朗
岩堀久子
藤田復生

近年小児の虫蝕症が激増している現状は一般によく知られているのであるが、重症型の小児ムシハつまり Rampant caries が約一〇年前に比し一〇倍の高率を示し、更にこれらのムシバが小児たちの健康に案外大きな為害を与えている点は、今日あまり知られていないかと思う。虫窩が一たび根管に交通せるものは、種々なる細菌の体腔への感染門戸として、その意義はきわめて大きいのである。このような観点より私どもは一二二一名の学童、八四四名の女子短大生および六二九名の幼稚園児を対象として、小児ムシバの為害作用につき調査した。今回報告するものは本研究の一部である。

研究成績　①学童の調査ではムシバの保有数が多い子どもほど顎下淋巴腺の腫脹している者が多かった。幼児を対象としたものでは、重いムシバを持っている者ほど淋巴腺の腫脹している率が高かった。例えばC_3のムシバを有しているグループでは淋巴腺の腫脹している者が八一・一二%、C_1のムシバだけを持っているグループでは三六・二一%であった。なおムシバ皆無のグループでは一七・一四%でしかなかった。

② 乳歯のムシバがひどくなった場合根の先に炎症を起こし、その結果永久歯の発育不全を起こすかを学童・短大生二〇六五人につき調査した結果、五・八一%の発現率があった。

③ この研究でもムシバのない者の方が、ムシハのある者に比べはるかにかみ合わせがよいという結果が出た。しかも、重症ムシバをもつ者ほどかみ合わせが悪かった。ムシバの全くない者では正常なかみ合わせをしているものが七七・五%であったが、C_1C_2のムシバをもったグループでは正常なものは五四・五%であった。ところが、$C_1C_2C_3$のムシバ保有者を調査してみると正常なものは二二・四%しかなかったのである。

④ ムシバのために咀嚼能力を失った発育期の小児たちはしからざる小児たちに比べ体重の自然増加の上に影響があるかを調べた。重症なムシバを有している小児八三名をA、B、二群に分かち、A群